

タイトル：「アジア・アフリカ地域におけるグローバル化の多元性に関する人類学的研究」（平成 21 年度第 2 回研究会）

日時：平成 21 年 11 月 23 日（月曜日）午後 13 時半より午後 6 時半

場所：AA 研 301 室

報告者名（所属）：

- 1) 大村敬一（大阪大学 研究協力者）「イヌイトからみるグローバリゼーション：二つのネットワーク・システム」
- 2) 新井和広（慶應義塾大学 共同研究員）「ハドラーミー・ディアスポラ」の変遷

1. 大村敬一（大阪大学 研究協力者）「イヌイトからみるグローバリゼーション：二つのネットワーク・システム」

この発表では、極北の先住民であるカナダ・イヌイトの側からグローバリゼーションを考えることを通して、グローバリゼーションという歴史的事件の特質を明らかにし、その事件の中で人類学が果たすべき任務を考察した。

そのために、この発表ではまず、ラトゥールが「近代」の問題を検討することで示したグローバルな環境の現状分析に基づいて、イヌイトが直面しているグローバルな環境の現状を整理した。そのうえで、イヌイトが闘ってきた先住民運動をグローバリゼーションという歴史的事件の中に位置づけることによって、その運動を通してイヌイトがグローバルな環境に対して何を守ろうとしているのかを明らかにした。そして、そのイヌイトの闘いを考察することによって、グローバリゼーションと呼ばれる歴史的事件によって引きおこされている問題の根底には、「社会」と「自然」に分離することのできない人間と非人間（モノ）の複合体を構築して維持する異なるシステムの相克があることを明らかにした。そのうえで、今日、求められているのは、「一つの自然」を基盤とする「文化相対主義」ではなく、多様な人間と非人間の複合体の間の「自然＝社会（文化）相対主義」であり、真に共生すべきなのは「一つの自然」の上に築かれる様々な「社会（文化）」ではなく、多様なあり方で構築される人間と非人間の様々な複合体であることを示した。最後に、この「自然＝社会（文化）相対主義」において人類学が果たす役割について考えた。

2. 新井和広（慶應義塾大学 共同研究員）「ハドラーミー・ディアスポラ」の変遷

本報告では、南アラビアのハドラーマウト地方出身者がインド洋沿岸地域に作り上げてきたコミュニティ（ディアスポラ）の変遷を振り返ることで、豊かとは言えない地方が近代以降どのような方法で安定した社会を作り出してきたのかを論じた。

ハドラーマウトはアラビア半島南部の一地方で、現在はイエメン共和国の一部となっているが、イエメンの中心である山岳部とは歴史・文化的背景が異なる。ハドラーマウトの人々（ハドラーミー）は、厳しい自然環境や部族抗争の激化を背景に、18 世紀から 20 世紀中頃にかけてインド洋

沿岸地域、特に東アフリカ、インド、東南アジア島嶼部に大規模な移民を行った。現在これらの地域には移民の子孫が住んでいる。

インド洋沿岸地域への移民が最盛期を迎えた 20 世紀前半には、海外で経済的に成功した移民から故郷にいる親族への送金によってハドラマウトの経済が支えられていた。同時にハドラマウトにおけるモスク、学校、道路などのインフラ整備や、政治的に不安定なハドラマウト社会の改革のための資金も海外から提供された。そこにはハドラマウト(つまり本国)の状況が移民コミュニティの状況を決めるのではなく、移民コミュニティの状況(またはコミュニティの中の有力者の活動)がハドラマウトの状況に大きな影響を与えるという構図を見て取ることができる。ハドラマウト在住者と海外の移民たちは、インド洋をまたぐ形でひとつのコミュニティを形成していたのである。

インド洋沿岸地域への移民は 20 世紀中頃までに終焉を迎え、その後はアラビア半島内の国々がハドラマミーの主な移住先となった。このため現在ではハドラマミー・ディアスポラは「過去のディアスポラ」と認識されることも多い。しかしハドラマウト沿岸部の中心都市ムッカーでは、サウジアラビア、アブダビ、オマーンなどの国々に移住したハドラマミーからの資金によって多数の集合住宅やショッピングモールが建設されており、移民からの資金によって経済活動が支えられるという、以前と同じ構図を見ることができる。また、1990 年代前半に内陸部のタリームに設立された宗教学校では多数の東南アジア出身留学生が学んでいるが、その中には過去にハドラマウトから移住した人々の子孫も含まれている。ハドラマウトの人々は、ハドラマウトを取り巻く状況の変化に対応する形で移民先を選び、移民活動自体が終わった後も宗教教育などを通じて域外在住ハドラマミーとの人的つながりを維持しているのである。

このように、ハドラマウトの人々は領域国家の境界を超える形でコミュニティを作っているが、その大きな要素のひとつは域外からの送金である。20 世紀中頃までの時代とそれ以降では移住先に違いが見られるが、ハドラマウトの経済が送金に頼るという構図は現在まで変わっていない。地域の経済的な基盤を域外に求めるということは、社会を不安定にする要因と見なされることもあるだろうが、特定の産業や天然資源に頼るのではなく、それぞれの時代に経済機会が見込まれる場所を選んで移民し、そこで得た利益を故郷の繁栄につなげるという構造は、目まぐるしく動く現代の世界においては強みになる可能性が十分ある。